Community 4 Children

地域は子どものために、子どもは地域のために

Children 4 Community

一般社団法人コミュニティ・４・チルドレン
2018 年度事業報告・決算書
(2018 年 6 月 1 日～2019 年 5 月 31 日)
2019 年度事業計画・予算書
(2019 年 6 月 1 日～2020 年 5 月 31 日)

連絡先：一般社団法人コミュニティ・４・チルドレン
〒545-0021　大阪市阿倍野区阪南町 1 丁目 45 番 1－302 号
電話 06－6622－5645　　/fax　06－6621-7139
E-mail　community_4_children@yahoo.co.jp

はじめに

コミュニティ・４・チルドレン（以下、C4C)は、皆様の暖かいご支援によって 2018 年度の活動を実施することができましたので、ここに事業のご報告をいたします。

フィリピンでは、療育や奨学金に加えて、カバヤン町では３つの村の青年組織としょうがいのあるメンバーが共に取り組む IL 研修オリンピックスを開催し、ハッピー・ハロー村では、生計向上・就労支援のサポート、自主財源確保につながる第 2 回 Run for Amity(友好ラン)2019 （ラ・トリニダッド町）を開催しました。

タイでは、ノーンメック村でコミュニティ文化の継承や森林保護・保全、有効利用活動、青少年のための職業訓練を行っています。牛銀行プロジェクトから得られた基金から小学生１名に奨学金を提供しました。スタディツアーには 10 名が参加し田植えや植林、草木染体験などをしました。

宮城では、２つの「ぼうさいグッズ手作りキット」を開発しました。また自主勉強会（相談会）の開催、宮城県内外の地域で取り組む福祉や防災の学習実践の支援をしました。カンボジア離乳食研修事業は、カンボジアのカンダール県コントム郡チュークマウ行政区チョンサック村と宮城県での取り組みがコラボレーションする事業として 2 回の離乳食研修会を開催することができました。

カンボジアでは、ベトナム国境沿いのプレックチュレイ村とその周辺村の子ども会活動の支援と有機農業推進事業を支援しています。タイでのカンボジア人有機農業研修を終えた農民が有機農業を始めており、事業の成果が芽を出し始めています。

このように本会と 4 か国各地とのつながりを活かし上記のような事業を展開できたことで、本会の強みや特色を生かした形になりました。

2019 年度、タイではノーンメック村コミュニティ支援を柱に『結』による村の絆強化を図ります。フィリピンでは、自主財源の確保を継続的に支援していきます。宮城では、防災ゲームの開発（2018 年度から継続）、2018 年度に作成した『ぼうさいグッズ手作りキット』の普及啓発を進めながら、宮城県内を中心に実践活動の支援を行います。カンボジアでは、タイにおけるカンボジア人有機農業研修を継続し、有機農業の普及やそのネットワークづくりを支援します。

今後も 4 か国における課題解決や社会展望に合わせ、必要な支援を行うと共に、各国間の関係を活かして事業に広がりや深まりを持たせて行きます。

～ 目　　次 ～

・ はじめに　－ i

・ 2018 年度事業報告書　－1

1．NGO 支援事業　－1

1－1．海外支援事業　－1

A．フィリピン国 JPCom-CARES 支援事業　－1

B．タイ国カムクーンカムペーン財団支援事業　—9

タイ国ノーンメック村コミュニティ支援事業　－11

C.海外プロジェクト助成事業　－17

1－2．国内支援事業「宮城県における地域一体で取り組む福祉・防災学習推進事業」　－19

2．文化交流活動支援事業　－25

2－1．スタディツアー　－25

2－2．チャリティラン応援事業（フィリピン・しょうがい児・者自立生活支援事業）　－25

3．視察・研修・ワークショップなど　－26

3－1．研修事業　－27

3－2．国内 IDoCafé 事業　－28

4．パートナーシップ推進事業　－28

5．情報提供事業　－28

6．組織運営　－29

・ 2018 年度貸借対照表　－30

・ 2018 年度財産目録　－31

・ 2018 年度決算報告書 （損益計算書）　－32

・ 2019 年度事業計画書　－35

・ 2019 年度事業予算書　－39

2018年コミュニティ・４・チルドレン（C4C）事業報告書
Community 4 Children
2018年6月1日～2019年5月31日

1. NGO支援事業

1－1. 海外支援事業

フィリピン国 JPCom-CARES とタイ国カムクーンカムペーン財団と連携し、運営・活動を支援してきました。またカンボジアの NGO/Khmer Community Development と協働で、ベトナム国境のカンボジア農村の子ども会活動および有機農業推進活動の支援も継続しています。

A.フィリピン JPCom-CARES(フィリピン国バギオ市、ベンゲット州カバヤン町)支援事業

JPCom-CARES（ジェイピーコム　ケアーズ）は、必要な公共サービスや社会資源の乏しい山岳部バギオ市、ハッピー・ハロー村（バギオ市内)、カバヤン町の3カ所を拠点に、しょうがいのある子どもや青年層が、地域で自立し尊厳のある暮らしを営める地域づくりに取り組んでいます。

◆2018年度の事業対象者数(人):2018年6月～2019年5月の期間、下記の人数を対象に事業を行いました。

バギオ市	ハッピー・ハロー村	カバヤン町	計
81	15	43	139

1.リハビリテーション&保健プログラム

（1）リハビリテーションセンターでの理学療法、作業療法、教育支援

バギオ市にあるリハビリテーションセンター「STAC5（Stimulation & Therapeutic Activity Center：スタックファイブ)」(以下STAC5）では、あらゆるしょうがいを持つ子ども・青年を対象に、一人ひとりに必要な理学療法、作業療法および特別支援教育をアセスメントしサポートを行っています。月～金曜日、8時～17時まで開所し、一人につき1回約60～90分のリハビリテーションを週に2回提供しています。

発熱、眠気や空腹により療育に影響が出る子どもがいたため、療育前後の体調確認と変化に注意してもらうよう保護者にも協力をお願いしました。また、リハビリテーションの方法や家庭学習の指導案を保護者に伝え、各家庭でも療育支援が広がるように努めました。子どもたちのニーズ、各家庭や療育中の気づきを保護者と共有し、必要な際は医療費支援や医療機関へと繋ぎました。

◆リハビリテーション利用登録者数（人）:

期間	理学療法	作業療法	特別支援教育	計
2018年6月～8月	24	14	14	52
2018年9月～11月	26	18	14	58
2018年12月～2019年2月	24	19	17	60
2019年3月～2019年5月	22	14	14	50

◆リハビリテーションサービス提供数（回）：

理学療法	作業療法	特別支援教育	計
1,030	917	824	2,771

（２）医薬品（マルチビタミン剤）の支給

子ども達の発育や健康の促進、医療費の軽減のため、バギオ市 18 人、ハッピー・ハロー村 6 人、カバヤン町 14 人を対象に、４ヶ月ごとにマルチビタミン剤を支給しています。服薬忘れの防止や体調変化の記録のためにモニタリングシートを配布し、自身で健康管理ができるように促しています。

食欲や体重の増加、睡眠やアトピーの改善などが見られ、支給の必要がなくなった子どももいました。特に雨期は熱や咳症状が出る子どもも多く、体調を崩しにくくなった、回復が早いなど、保護者からは安心感を訴える言葉が聞かれました。高血圧やコレストロールをコントロールする薬を服用している青年には、健康的な食生活の指導を行い、実際に体重の減量が見られました。

（３）医療サービスや医療機関の紹介・照会

新規利用者や療育支援を行なっていく中で専門医による受診の必要性が出てきた子ども 18 人を対象に、連携する内科医、小児科医、神経科医、眼科医や歯科医等に繋ぎました。

診断によりリハビリテーションが必要な子どもが STAC5 で療育支援を受けられるように、スタッフが学校を訪問し診断結果を共有し、早退ができるように調整を行いました。

（４）医療費等の一部支援

子どもたちのしょうがい把握や特性を知るためには、専門医による診断が重要ですが、初回診療は 2,000～2,200 ペソと非常に高く、経済的理由により必要な診察を受けられない子どももいます。また、急に体調を崩した際にも、経済的な理由により、適切・必要な医療サービスを受けられない子どももいます。そこで子どもたちの体調維持・健康管理に必要な医療的ニーズにかかる費用をサポートするため、一人につき 1,000 ペソの支援を行い、2018 年度は 17 人の子どもに支給しました。

（５）保健プログラム

以下のプログラムを実施しました。

◆温水療法

日　　時：10 月 3 日、4 月 24 日

参加人数：10 月 3 日：15 人、4 月 24 日：13 人

理学療法を受ける子どもたちを対象に、温水プールでの温水療法を実施しました。血液循環の改善、筋肉や関節の弛緩が促進され、痛みや炎症、ストレスが軽減し、免疫力を高める効果があります。特に、脳性まひの子どもたちの筋肉の緊張を和らげてくれます。ご家族や保護者も参加し、理学療法士の指導のもと、子どもに合わせたマッサージやエクササイズを実施しました。中には、少しずつ水に慣れ、水中でバランスを保つことができるようになった子どももいました。「子どもとの絆を深められた」、「新たな友だちができた」と、参加者同士の繋がりが育まれた時間となりました。10 月は、バギオ市社会福祉局の協力も得られ、４人の職員が参加してくださいました。

◆健康フェア（Irisan 地域主催）
日　　時：7 月 27 日
参加人数：STAC5 より親子 2 組、スタッフ 2 人
　Irisan 地域が地元小学校で開催する「Health Fair（健康フェア）」に、しょうがい児が参加できるよう活動をサポートすること、他組織とのパートナーシップを構築することを目的に、スタッフ 2 人が参加協力しました。STAC5 を利用する 2 組の親子も参加し、保護者同士が経験共有や意見交換を行う姿も見られ、「新たなアイディアを学ぶことができた」との声が聞かれました。

◆健康フェア（JPCom-CARES 主催）
日　　時：10 月 24 日
参加人数：総勢 214 人（子ども、保護者、ご家族、関係者含め）
　STAC5 の設立 21 周年を祝い、健康フェアを開催しました。参加者の健康増進を目的として、マッサージや鍼治療、血圧測定、血糖値測定、眼科検診、インフルエンザワクチンの接種など、様々なサービスを提供しました。

◆無料の眼科検診
日　　時：11 月 16 日
参加人数：14 人（子ども・保護者）
　地域パートナーである 2 人の眼科医と連携し実施しました。10 月の健康フェアで眼鏡が必要との診断を受けた子どもたちに対しては、無料で眼鏡の提供もしてくださいました。

２.教育支援

（1）奨学金の支給

　経済的に厳しい家庭の小学生から高校生までの子どもたちに奨学金を支給しています。奨学金は、学費以外に通学費や制服の購入などにも使われています。
　定期的に家庭や学校訪問を行い、学校生活の様子や学習状況について情報共有を行いました。「コミュニケーションスキルが向上している」、「学習に向かう姿勢が見られるようになった」、「自己肯定感や自信も育ち、クラスメイトの輪の中にも積極的に加わっている」など、担任の先生から奨学生たちの成長した様子を聞くことができました。時には欲求や感情のコントロールが難しい際に、物を投げたり、机を叩いて表現する子どももおり、STAC5 での療育計画に反映しサポートしていくことになりました。
◆支給対象者人数

地域	全額支給（5,000～9,000 ペソ/年：10,000～18,000 円）		
	小学生	高校生	大学生
バギオ市	6 人	4 人	0 人
カバヤン町	3 人	18 人	0 人
計	9 人	22 人	0 人

（2）学用品の支給

6 月 6 日にバギオ市の 13 人に、6 月 7 日にカバヤン町の 23 人に、学校で必要な基本的な学用品を支給しました。子どもたちの継続した学びをサポートし、家族の経済的な負担を軽減することが目的です。子どもたちに、学校へ行くことや学ぶことの大切さを伝える機会となっており、特に、就学中の兄弟姉妹が多い家庭には、大きな助けとなっています。

（3）奨学生を対象とした仔豚の貸与プロジェクト（カバヤン町）

これまで保護者の生計向上を目的に行ってきた仔豚の貸与プロジェクトですが、今年度より、自身の教育や進学に必要な財源の獲得や家計をサポートするため、対象者を奨学生に変更し、取り組みを改めました。農業や養豚・養鶏などの第一次産業が主産業であるカバヤン町において、将来、自身の生計の可能性の一つとして、養豚の技術や知識を習得することも目的としています。JPCom-CARES の養豚場で生まれた仔豚を 1 人につき 2 頭ずつ、1 頭 3,500 ペソで貸し出し、得た収入から仔豚代を返済してもらいます。豚の成長や収支などを記録してもらうようノートの配布も行いました。

第 1 期メンバーの 4 人は、下校後に餌やりや豚小屋の掃除などに取り組み、自身が飼い主であることに責任や喜びを感じると同時に、収入を得ることの難しさも学んでいるようです。

3.自立生活プログラム（Independent Living Program ： IL プログラム）

青年へと成長している子どもたちが、将来、地域の中で、自分でまたは家族や地域の方々とともに自立した生活ができるように、2012 年 10 月より「自立生活プログラム」を開始しました。

（1）プログラムの実施

ソーシャルスキル、生活スキル、生計スキルなどの習得を目指し、以下のプログラムを実施しました。アウトドア活動も行い、ボールを使った運動では、視覚情報と体の動きを連動する力を育み、公園の遊具を使った障がい物競争では、楽しみながら体を動かし持久力を育む機会となりました。

継続して参加するメンバーは、少しの説明で理解し、反復訓練を通した技術の習得が見られます。何かお願いする際には、「すみません」や「ありがとう」などの言葉も伝えられるようになってきています。中には、説明スライドの文字を読むことはできるものの、その言葉の意味や内容の理解が難しい、集中力が短く周囲の環境の影響を受けやすい、といったメンバーもいます。完結・簡単な説明を心がけ、個別のサポートが必要なメンバーには、スタッフが一人ずつ寄り添い支援を行っています。興味や関心を持って主体的に参加してもらえるよう多様性のあるプログラムづくりに取り組みました。

◆バギオ市

グループ	対象人数	実施日	プログラム内容
【グループ 1】 毎週木曜日 9 時-4 時	9 人	8/9, 16, 23, 30 9/6, 13, 20, 27 10/4, 11, 18 11/8, 15, 22	・参加者同士の自己紹介、スタッフ紹介 ・ソーシャルスキル （挨拶、アイコンタクト、表情、スキンシップ、男女間のコミュニケーション） ・基本的な礼儀作法やマナー

		12/6,13 1/10,17,24,31 2/7,14,21,28 3/7,14,21 4/4,11,25 5/2,9,16,23 （計：34 回）	（テーブルマナー、公共の場：ジプニー、教会、モール、スーパー、学校） ・身だしなみ （手洗い、口腔ケア、顔・髪・耳・鼻・爪・脇・足のケア、更衣の方法、トイレの使い方、生理用品の使い方） ・調理技術（昼食準備） （食材の衛生管理、様々な調理方法、調理道具、食材の準備、調味料、テーブルセッティング、手洗い、後片付け） ・家事技術 （掃除、洗濯、簡単な裁縫、ゴミの分別、庭掃除、草刈り） ・健康管理 （打撲や切り傷の応急手当ての方法、腹痛・便秘・下痢の各症状や原因、自宅での療養の仕方、早めの養生の必要性） ・お金の管理 （紙幣と貨幣、買い物実践） ・アウトドアプログラム （公共交通機関の利用方法、しょうがい者割引の利用の方法、マーケットへの買い出し、道路標識の理解、公園でのエクササイズ） ・ビーズアクセサリー作り （クリスマスデコレーション、ビーズブレスレット、リサイクル品を使った物作りなど）
【グループ 2】 毎週火曜日 9 時-12 時	11 人 （うち 5 人はグループ 1 と同メンバー）	8/7,28 9/4,11,18,24 10/2,9,16,23 11/6,13,20,27 12/4,11 1/8,15,22,29 2/5,12,19,26 3/5,12,19 4/2,9,16,23 5/7,14,21,28 （計：35 回）	

◆カバヤン町

参加メンバーの居住エリアが広範囲なため、夏季休暇中に合宿形式で 2 回実施しました。共同生活をしながら、実践を通したソーシャルスキルや生活スキルの習得を目指しました。今年度は、カバヤン町の 3 つの村の青年組織（サングニアン・カバタアン:Sangguniang Kabataan）よりユースメンバーが参加しました。「IL 研修オリンピックス（IL Training Olympics）」と題し、しょうがいの有無に関わらずグループ活動を通して、参加者の可能性や潜在能力をエンパワメントし、相互のパートナーシップを構築することを目的としています。

日程／参加人数	プログラム内容
4 月 11 日～15 日 IL メンバー：13 人 ユースメンバー：20 人	前半 2 日間は、外部のボランティア組織のスタッフを講師として招き、リーダーシップ研修を実施しました。SDGs や地域課題についてディスカッションし、活動計画の立て方などについても学びました。後半 3 日間のグループ活動では、交流や助け合いが見られ、研修内容が活かされている場面も見られました。このような研修の機会に恵まれないユースメンバーたちからも喜びの声が聞かれました。

5 月 17 日～21 日 IL メンバー：12 人 ユースメンバー：7 人	グループに分かれ、家事技術や調理技術、ガーデニング技術について学びました。最終日には、保護者たちも招き、研修成果の発表会を行いました。内気な若者たちも、自身の持つ才能や芸術性を存分に発揮し、2 ヶ月の研修を通して参加者同士に絆が生まれていました。

（2）生計向上・就労支援

ハッピー・ハロー村では、就学期間を終えた 20 代以上の青年が、それぞれ興味・関心に添った生計プロジェクトをスタートしており、モニタリングとサポートを行いました。

Aprila さんは、自宅で雑貨店を営むと同時に、定期的に豚を屠殺し生肉販売も開始し、固定客もついて安定した収入に繋がっています。自身のマッサージスキルも生かし、依頼があれば、出張セラピーを行っています。

Daisy さんは、畑で白菜やかぼちゃ、タロ芋、ピーナッツなどの野菜の栽培・収穫を行い、村内でマーケットを開拓し販売しています。きのこの菌床も 100 袋育てており、半年ほどで約 27 キロの収穫があり、純利益は約 2,500 ペソ（約 5,000 円）でした。各菌床によって、きのこの成長具合にばらつきがあるため、販売可能なまとまった量を収穫できるタイミングが不定期であることが栽培の難しさですが、基本的な畑仕事のスキルや生活リズムも身につき、やりがいも感じながら取り組んでいます。

それぞれのしょうがいから困難に遭遇することもありますが、家族も協力し、またスタッフも解決の方法を一緒に考えサポートしました。

４.保護者のエンパワメント

保護者の生計向上を目的に、以下の取り組みを行いました。

◆きのこ栽培研修（バギオ市）

日　　時：2 月 14,15 日

研修内容：菌床販売も行っている地元大学にて、ヒラタケ（Oyster Mushroom）と椎茸栽培の研修を行いました。

バギオ市より 5 人、カバヤン町より 3 人の保護者が参加し、菌床の作り方、栽培と収穫方法などについて学びました。研修を通して、自身での栽培が難しいと感じた保護者もいましたが、健康への意識が強まっている消費者の需要が高いこともあり、3 人の保護者がきのこ栽培を開始しました。1 人の保護者は、研修後の 3 ヶ月間で、9 キロ近く収穫し約 2,300 ペソ得ることができました。

◆農業研修（カバヤン町）

日　　時：4 月 16 日

研修内容：保護者や IL 研修生を対象に、種からの発芽の方法について、種子会社を招いた研修を行い、52 人が参加しました。発芽のプロセスやメンテナンス方法、成長に影響する環境因子や病気とその予防方法など、基本的な知識を得ることを目的に実施し、技術を積極的に学ぶ参加者の姿があり関心の高さが伝わってきました。

5. 権利擁護・コミュニティ啓発活動

アドボカシー活動として、以下の行事を実施しました。

◆地域の清掃活動（バギオ市）

日　　時：10 月 12 日

活動内容：地域貢献活動の一環として、公共の公園の植樹と草取りを行いました。子どもたちも楽しみながら一生懸命に取り組み、助け合いながら取り組む姿も見られました。また、多数の村の役員の方々も参加してくださり、総勢 120 人の参加がありました。

◆介護士を目指す高校生へのオリエンテーション（バギオ市）

日　　時：11 月 12 日

活動内容：介護士を目指す高等学校の生徒 18 人を対象に、JPCom-CARES の取り組みについてオリエンテーションを行いました。ニーズやしょうがい特性が一人ひとり違う子どもたちに、どういった療育支援を行なっているのか、具体例を出しながら説明を行いました。

◆学習しょうがいに関するセミナー（バギオ市）

日　　時：12 月 11 日、12 日

活動内容：地元小学校の教諭や保護者約 60 人を対象に、学習しょうがいに関する知識と理解を深めるためにセミナーを行い、子どもたちに必要な支援について意見交換を行いました。

◆バギオマラソン 2019（バギオ市）

日　　時：1 月 6 日

活動内容：子ども 9 人、保護者・家族 12 人が、バギオ市内で開催されたマラソン大会に参加しました。地域パートナーとの関係構築の機会となり、大会収益から 10,000 ペソの寄付金を STAC5 にいただきました。

◆自閉症啓発月間ウォーク（バギオ市）

日　　時：1 月 19 日

活動内容：子ども 16 人、保護者・家族 19 人が、自閉症児・者への理解を深めることを目的に、バギオ市内のパレードに参加しました。

◆大学訪問ツアー（バギオ市）

日　　時：3 月 16 日

活動内容：STAC5 で実習を行う大学の心理学科と連携し、学生企画による学内ツアーを催し、子どもと保護者など総勢 80 人が参加しました。多様な人々とともに過ごすことを通して、子どもたちの地域社会への参加を促進し、学生たちのしょうがい児・者への理解や学んでいる専門性を深めることを目的として、今年初めて実施しました。

構内の博物館や図書館、池や自然を散策し、子どもたちだけでなく、同行した保護者も楽しんでいました。企画した学生からは、「次回のプログラムでは、カウンセリングやシェアリングのような保護者向けの場づくりも入れてはどうか」といったアイディアも聞かれました。

◆マグナカルタ研修（カバヤン町）

日　　時：3 月 21 日、22 日

活動内容：スタッフがカバヤン町の 3 地域を訪問し、フィリピンにおけるしょうがい者の権利について書かれた法律マグナカルタについて研修を行いました。各村の役員メンバーやヘルスワーカー総勢 115 人が参加し、権利とともに、制定されている具体的な政策についても研修を行いました。

各村では、専門性や知識不足のため、十分な地域調査を行うことができていない現状があり、しょうがい福祉の予算の使途についても意見交換を行いました。

6. ネットワークづくり・社会資源の活用

地域パートナーや各関係者・機関とのネットワーク構築、事業に必要な財源の確保を目指し、下記の取り組みを実施しました。

◆募金箱の設置活動（バギオ市）

日　　時：通年

活動内容：連携する団体、カフェやオフィスなど約 40 箇所に募金箱を設置しました。1 ヶ月で 5,000 ペソの募金額の達成を目標にしていましたが、年間を通して、11,544 ペソ（約 23,000 円）のご寄付を得ることができました。

◆クリスマス＆年度末の集い（バギオ市）

日　　時：12 月 19 日

活動内容：子どもや保護者・家族に加えて、地域パートナーも招き、総勢 297 人が参加し、親睦を深めることができました。

◆Run for Amity(友好ラン)2019　（ラ・トリニダッド町）

日　　時：3 月 10 日

活動内容：活動に必要な自主財源を確保し持続的に活動していくこと、関係者や多様な人との友好や親睦を深めることを目指して、第 2 回「Run for Amity（友好ラン）」を開催しました。ランナー参加者

461 人、運営関係者 178 人の総勢 639 人の参加がありました。

今年度は、STAC5 でリハビリテーションを受けている子どもとご家族、地域のしょうがい児・者 75 人の参加がありました。子どもたちからは、「来年は 5 キロを走ってみたい」、「参加できて嬉しかった」、「新しい友だちができた」といった喜びの声が聞かれました。町長からは「多数の子どもや保護者たちが、笑顔で参加している姿を見て、子ども達がもっている力に驚きと喜びを感じた」とメッセージを伝えてくださいました。本取り組みを通して、約 150,000 ペソ（約 324,000 円）の資金を獲得することができました。内、約 25,000 ペソ（約 54,000 円）をラ・トリニダッド町に寄付し、行政が運営するしょうがい児・者のためのリハビリテーションセンターの運営に使って頂きました。

【成果と課題】

昨年度に引き続き、自主財源の確保、ネットワークの拡充と新たな地域パートナーの獲得を目指し、第 2 回 Run For Amity の開催を行いました。また、募金箱の設置活動を新たな取り組みとしてスタートし、少しずつではありますが自主財源が増えてきています。

各連携団体とも、これまで以上に関係性が深まり、一歩進んだ取り組みを行うことができました。バギオ市では教育機関と連携し大学生が学校訪問ツアーを企画し、連携団体が実施主体となった取り組みが生まれました。カバヤン町では村の青年組織メンバーの若者を新たに巻き込み、IL 研修オリンピックスを実施することができました。どちらの取り組みも、しょうがいのある子どもたちだけでなく、関わる大学生や地域の若者にとっても、気づきや学びが生まれた機会となりました。

また、カバヤン町、バギオ市、ハッピー・ハロー村の 3 地域の保護者や青年たち数人が、生計向上の一つとして、きのこ栽培をスタートしました。環境に繊細な菌床を栽培する難しさもあり、安定した収入に繋がっている家庭はまだ少ないですが、次年度、少しずつでも定期的な収穫・収入が見込めるようにサポートを続けていきます。

子どもや青年一人ひとりのしょうがいの特性や興味・関心、強みも違いますが、必要な支援を見極めながら、地域資源をつなぎ、それぞれが思い描く将来展望へと進んでいけるようにサポートを行っていきます。

B. タイ国カムクーンカムペーン財団（以下、KK 財団）支援事業

2018 年度より、子ども個人に対する直接支援と、子どもを見守るコミュニティ支援とを分離させ、これまでの個人に対する支援から、ノーンメック村のコミュニティづくり事業に重点を置くことになりました。それにともない子ども個人への支援を行う KK 財団の事業と、ノーンメック村におけるコミュニティづくり事業を分けて支援しました。

■タイ国カムクーンカムペーン財団支援事業

東北地方コンケン県ムアン郡サワティー行政区ノーンメック村とその周辺地域で、自治体、学校などと協力しながら、子どもの奨学金支給事業を中心に活動を行いました。次年度よりコミュニティを基点にした支援に転換します。

１、奨学金

出稼ぎ、死別、離婚などの理由によって両親と日常的に一緒に暮らすことができず、経済的にも困窮した小学生から大学生まで 25 人に、年額 6500 ﾊﾞｰﾂ（約 2 万 3 千円）の奨学金の支援を行いました。奨学生は奨学金を受け取るだけでなく、財団が行う様々な活動にも参加し、他の子どもたちと交流しました。

2、生きるためのアイディア活動

日時：6 月 17 日＠財団事務所　参加者；15 人

奨学生を対象に、社会に出て必要になる知識や経験を学ぶ場を持ちました。今回は、労働・社会福祉省の担当者を呼んで、自分たちを取り巻く様々な社会保障制度についての話を聞き、自分たちの家族がどのような保険や補償を得ることができるのかを学び、質問や話し合いを通して、自分の将来設計を考える機会としました。

3. 子どもを愛するネットワーク

日時：7 月 14 日、8 月 7 日＠ムアンポー村奨学生の家　参加者；保護者と子どもたち 35 人

保護者たちが集まり、お互いを知り合い、子育ての悩みや疑問をぶつけあい、お互いの関係をよくする場を持ちました。普段なかなか親と喋る時間が持てず、言いたいことがあっても言えない子どもたちも、親と落ち着いて話す時間を持つことができました。

4. 青少年のための職業訓練

日時：8 月 12 日＠財団事務所　参加者；子ども 20 人

専門学校で家政学を学ぶ奨学生の先輩が、年少の子どもたちにタイのお菓子ココナッツ・プリンの作り方を教え、みんなで一緒に実習しました。お菓子は自分の家でも作って家族に配れ、売れば収入にもなります。また創造力を育てる学習にもなります。みんな楽しみながら実習していました。

5. 青少年スポーツ能力向上

日時：7 月 26 日、8 月 20－31 日＠ムアンポー村小中学校　参加者；子ども 32 人

ドラッグに手を出さないように、そして子どもの生活を充実させるために、バレーボールやサッカーなどの球技を支援しています。トレーナーの指導の元、楽しく正しい技術を学ぶことによって、よい健康が手に入り、子どもの能力によってはプロの選手も目指すことができます。この村からは、女子 1 人がナショナルチームのメンバーも輩出しているバレーボール・クラブに引き抜かれて行きました。そのため村や学校のスポーツに対する熱意が高く、多くの競技会にも参加していますが、競技会参加のための交通費、飲み物代、ボールなどの道具代などが不足しているため、財団が支援しました。

■ノーンメック村・青少年とコミュニティ支援事業

子どもの健全な成長は、身近にいる家族、親族、隣人などが協力して見守る必要があると考え、コミュニティづくりを応援しています。ノーンメック村では、農業をやめて出稼ぎに行く人が多く、そのため子どもを育てることができない親が祖父母や親族に子どもを預けます。子どもは、愛されていることに自信が持てないまま成長し、将来の目標が見えません。子どもを支援するには、まず大人たちがしっかりとコミュニティの中で絆を深める必要があります。

本事業では、有機農業普及と伝統的文化の復興を柱に、コミュニティ内で大人も子どもも一緒に働ける環境を整え、将来に繋ぎます。

１、有機農法の普及

◆子どもとコミュニティのための有機農業実験農場での稲作

@アランヤー実験農場　参加者；ノーンメック村とその周辺農村の大人、青少年約 50 人

子どもたちに地域や「農」文化を愛する心を育て、村人にとって家計や農業のコストダウン、食の安全や環境にもよい有機農業を推進するため、村人の一人が無償で貸してくれた土地で、地域の大人や子どもたちとともに、有機農法で稲作を初めて 3 年目になりました。稲作の全行程において、村人たちは無償で労働力や農具などを提供し、田植えと稲刈りの『結』では、多くの人の参加がありました。

3 年目を迎え、化学肥料や農薬を使わなくても収穫でき、土壌の状態もよくなり、虫や魚、カニや貝などが田んぼで増えているのが目に見えるようになりました。村人の協力関係は強化され、無償で労働力を提供する『結』の伝統が復活しました。

有機農業による成果を目の当たりにした農民の中には、堆肥や液肥を自分の田んぼでも使用するようになった者もいます。液肥や自然のホルモン剤にもなる光合成細菌については、簡単に作ることができ、値も安く、年中様々な植物に使用でき、その成果もよいため、村の多くの人が使用するようになりました。

2018 年は雨が少なかったため、水の管理が困難だったので、計画的に素早く適時に肥料投入などを行わなければなりませんでしたが、村人の協力によって 11 月に稲刈りを終え、805 キロ（籾付き米）の収穫がありました。

事業開始から 3 年間で、大人も子どもも協力することを通じて信頼を築くことができ、同じ志を持つ仲間としての友情や愛情が育ち、自分たちの生き方に自信を持つことができたようです。そして安全な食はおいしいということも多くの人が理解しました。今後も実験農場を有機農業の実践の場、オリジナルな種子の貯蓄、堆肥づくり場などとして、人々が集まれる場にしていく予定です。

稲作スケジュール

日時	活動	備考
2018 年 5 月 12 日	耕起、堆肥づくり	
6 月 14、24、29 日	苗床づくり、一部直播	
7 月 11、12 日	堆肥づくり	
8 月 3，5 日	ぼかし、液肥作り、田植え	田植えには約 50 人参加（村の大人、青少年、関心のある者、スタディツアー参加者）
8 月 18、29 日	ぼかし、液肥投入	
9 月 10、17、23 日	雑草抜き、雑草刈	
10 月 2、10、17、21 日	堆肥・液肥投入	
11 月 7、10、11、12、16、17、18 日	稲刈り、脱穀、米蔵へ運搬、マメ科の種子を播いて覆土	稲刈りには約 55 人参加（村の大人、青少年、関心のある者、スタディツアー参加者）
12 月 16 日	緑肥（サンヘンプ）植え付け	
2019 年 5 月 18 日	堆肥、液肥作り	初めて参加した者を含め 21 人

２、コミュニティ文化の継承

◆寺院での行事参加　＠ノーンメック村寺院

日時：6 月 10 日、7 月 28 日、8 月 2、4、11、19、26 日、9 月 2，9、17、24 日、10 月 14、20 日、11 月 10 日、12 月 31 日、1 月 13 日、2 月 19 日、4 月 15 日、5 月 25 日、合計 19 回

雨安居期の仏日、村人の葬式、仏教行事、タイ正月の際に、子どもたちを連れて仏教寺院に行き、飲み物の寄進を行い、行事に参加し手伝いました。寺院は村落社会の中心です。コミュニティの人々が多く集まる行事に参加し、村の伝統的行事を守る一端を担うことによって、村人たちも有機農業を含む様々な活動を助けてくれるようになりました。

◆コミュニティで生産物を生み出す資源開発のための研修

日時：3 月 29 日　＠ノーンメック村　参加者；村人 20 人

コミュニティの様々な自然資源はいつか破壊されてなくなってしまうかもしれません。今、あるものに価値を見出し、利用し、生活に有用なものに加工することを村人たちと考えています。そのために今回は、高齢者が多い村では健康に対する関心が高いことから、健康に着目した研修を行いました。

村では、糖尿病、高血圧、腎臓病、足痛を訴える者が多く、食生活が原因となっている場合も多くみられます。そこで、村内で調達でき、大人も子どもも食べられる材料を使った、健康によい代替食作りに挑戦しました。カラシン県カオウォン郡農村から来た青年たちが、自分たちが作っている有機米と健康について説明し、健康によい食の作り方を教えてくれました。学んだのは、薬草水をかけたせんべい、コメのとぎ汁、薬草茶の作り方と利用のしかたでした。実際に作り、そのおいしさを知った村人たちは、4 月のタイ正月にみんなで作って村内で配ろうと計画しました。将来、このような健康によい食を商品化し、収入向上につなげることも検討しています。

３、森林保護・保全、有効利用活動

◆植林　@ノーンメック村公共地

日時：6 月 31 日苗木準備、8 月 3、4、18、25 日植林

参加者：ノーンメック村と周辺村からの大人と青少年約 50 人

　これまで近隣村の住民によってキャッサバが植えられていた土地が、正式な測量の結果、村の公共地であることが明らかになりました。村長を始め村人たちが自治体や土地の使用者と話し合い、村の公共地を返還してもらうこととなり、キャッサバを抜いた後、植林をしました。当日は、寺院の僧侶や日本からのスタディツアー参加者も含め、多くの人々が植林に参加しました。また、すでに公共林として保護しているところにも、継続して補助的植林を行い、村人たちに様々な恩恵を与える森を目指しています。

◆植林と自立のための農業モデル村から学ぶ研修

日時：8 月 30-31 日@サコンナコン県プーパーン郡コーククー行政区ノーンフアチャーン村、ナーントゥン村、クットバーク郡クットバーク行政区ブア村、パンナーニコム郡バヘー行政区バヘー村

参加者：ノーンメック村住民 17 人（有機農業を始めようとする農民、関心のある農民、村落委員会の委員）

　森林を保護し、森の産物の商品化に成功した村を訪問し、森林保護・管理の方法、森の産物の知識、それらの加工、家族林の普及と保護などについて直接、モデル村の村人たちから学びました。当該地の村人たちは、それまで人々が見向きもしなかった森の中に自生する野生のベリーを増やし、ワインやジュースに加工し、商品化を行い、事業として成功しました。研修の参加者は、市場開発、収入向上、コミュニティ内で資源を回す重要性、そして青少年グループの設立などについて意見を交わし、新しい知識や経験を得ることができました。その後、自分の村に持ち帰って、実践で試すことになります。

◆青少年の収入向上とコミュニティ内植林のための種苗づくり

日時：3 月 27、28 日、4 月 28 日　@実験農場

参加者：ノーンメック村青少年 10 人

　環境と人々の収入向上のため無農薬の地元の種子や苗のファンドを作ることを計画しています。そして村の森林を愛し守る心を育てるため、大人も子どもも一緒に学べる活動です。

　いつも大人たちが森に入って染の材料となる樹皮、草木などを採集していると、子どもたちがついてきて遊びながら手伝おうとしてくれます。そこで小さな子どもも遊びながら学べるような活動として考えました。まず子どもたちと一緒に苗木用ハウスを作り、身近な森で採集した有用樹木や薬用根茎類などの種子を植えて、苗木ポットを用意しました。苗として育てば持ち帰って自分の土地に植えることもできるし、売れば子どものお小遣いにすることもできます。村の青年がリーダーとなって、子どもたちと楽しく活動しています。

４、青少年のための職業訓練

◆草木染

草木染は、村の生活の中で時間を見つけ、副収入を向上させる仕事になります。また自分の努力によって、よいものを作ることができ、自信と積極性を身に着けることができます。またコミュニティの資源を保護・保全することにつながります。

・日時：10 月 21、27、29、31 日　@アランヤー実験農場　参加者；ノーンメック村青少年 8 人

出稼ぎすることなく、村の中で若者が働けるように仕事づくりをしています。収入向上のため、そして村内で生産できる仕事として、そして若い世代に地元の伝統的知識に関心を持ってもらうために藍染と草木染を始めました。他県の藍染や草木染が盛んな村で研修を受けた村の青年と一緒に、①藍作り、②絞りデザイン、③藍染、④草木染と触媒、⑤樹木から作る触媒について学び合い、それぞれ参加者は役割分担をし、村で探せる資源を使いました。もし染製品の質が上がれば、Facebook 等の SNS を通じた販売方法を考えているところです。

・日時：12 月 22、23 日、1 月 17、18、20、21 日、2 月 10 日　@アランヤー実験農場　参加者；ノーンメック村青少年 8 人

10 月に行った研修と同様、泥藍作り、藍染、絞り染めのデザイン、草木染、触媒について楽しみながら学び合い、実践練習しました。何人かの青年は、泥藍を家に持ち帰り、各自管理することにしました。何度も行い、染めのデザインも以前よりうまくなり自信を持つようになりました。

・日時：3 月 19 日　@ノーンメック村　参加者；青少年と女性 7 人

これまで学んできた藍染、絞り染め、染色、デザインの技術を向上させる実践を行い、市場開拓・販売方法、知識を伝え、人々と利益を分け合い他者を助けるソーシャルビジネスについて、みんなで学び合いました。

・日時：4 月 5－7 日　@パトゥムタニー県王立農業博物館　参加者；ノーンメック村青年 3 人

有機農業祭に参加し、草木染を子どもたちに教えました。

５、青少年ネットワーク形成・交流

◆自然利用の研修

日時：10 月 9－11 日@サコンナコン県プーパーン郡コークプー行政区ナーントゥン村、クットバーク郡クットバーク行政区クットベート村、ブア村

参加者；ノーンメック村青年 3 人

藍染と草木染、絞りの技術向上、価値を高める家族林の保護と管理について学ぶため、村の青年が研修に参加しました。様々な用途や価値がある森の植物を知り、エコツーリズムについても知識も得まし

た。これまで村外での研修を受けたことがなかった参加者は、新しい知識や経験を得て、関心を持ち、自分で考え表現するようになりました。

◆ネットワーク交流と研修　参加者；ノーンメック村青少年８人

農民として必要な知識（土地改良、職づくり、家族林の保護と管理、草木染）の学びと他者との交流を目的に、青少年が有機農業ネットワークの村や農民を訪問しました。

日時	場所	活動
12 月 19－21 日	・カラシン県カオウォン郡クムカオ行政区クッシム村 ・ムクダハーン県ムアン郡カムアーフアン行政区クラームブン村	―有機農業を実践するＵターンとＩターンの夫婦を訪問し、これまでの経験を共有しました。 ―藍染が盛んで、多くの村人が新しいデザインの藍染を生産している村を訪問し、染めの研修を受けました。
1 月 25 日―2 月 3 日	サコンナコン県クッバーク郡クッバーク行政区ブア村インペーン・センター	この村は、森の中にあり、様々な地産物をコミュニティ内で生産しており、以前も、ノーンメック村のリーダーたちを研修に連れて行き、森林の有効利用と管理・運営方法を学んだところです。経験豊富な長老たちから、農民として村で自然とともに生きていく方法を学びました。
2 月 14 日	コンケン大学農業祭	自分たちで作った藍染、草木染の布を出展し、実際に販売しました。初めて物を売る青年がほとんどだったので、売り方、話し方、会計など様々なことを学びました。
2 月 23－24 日	チャイヤプーム県ノーンブアデーン郡ナーンデーット行政区ノーンマオ村小学校	今まで自分たちが学んできた草木染と絞り染めの技術を子どもたちに教えました。他人に教えるのは初めての体験でしたが、緊張しつつも楽しみながら教えることで、染めの技術も向上しました。

6. 就労支援資金

これからのコミュニティの存続には欠かせない人材育成の一環として、適した青少年がいれば就労支援資金を支給しています。

ノーンメック村の一人の青年に理髪師として家で仕事ができるように、起業資金として 1 万バーツを支援しました。彼は、以前工場で働き、酒やドラッグに溺れ、全く貯金をしませんでしたが、同居する母方祖母が癌になり、ほとんど家で寝ている状態になったため、村に帰って祖母の介護をし始めました。彼の両親は、若い時に出稼ぎ・離婚・再婚を経験し、子どもを養うことがなく、彼は小さな頃から祖母に育てられました。村で仕事を探さなければならなくなった時、彼はインフォーマル教育で理髪の短期研修を受け、叔母さんに古い理髪用道具をもらい受けて、村の中で理髪の仕事を始めました。村にいる高齢

者は、歩くことが困難であるため、求めに応じて家庭まで出張理髪サービスをしています。また家の一部に椅子や道具を置いて、理髪するようになりました。彼は、祖母のために家事をすべてこなすだけでなく、コミュニティの活動もよく手伝ってくれます。そんな彼の姿を見て、村人たちもよい変化に気づき、信用するようになりました。そこで家でも仕事ができるように、理髪用椅子や道具などを買うための企業資金を支援することになりました。現在、理髪で得る収入は 200 ﾊﾞｰﾂ（約 600 円）/日です。

7. 牛銀行プロジェクト

2013 年 6 月から、出稼ぎによる若年層流出を止め、コミュニティの担い手を育てるために牛を育てて得た利益で村の青少年の就労支援基金の設立を目指すために、ノーンメック村で牛銀行プロジェクトを開始しました。一家族に 3 頭の母牛を貸出し、これまで 6 世帯の家族が飼育し、生まれた子牛の 1 頭ずつを村の牛銀行委員会に利子として返却してきました。現在、2 世帯が合計 6 頭の母牛と子牛を飼育しています。得られた子牛は売却や交換をして現金化し、2018 年度は委員会の話し合いの結果、家庭に恵まれない小学生一人に奨学金として 2000 バーツを提供しました。牛銀行委員会の村人たちは、明朗会計と誠実な飼育者の人選に責任を持ち、常に話し合いを通して決定しています。自分たちのプロジェクトであることを確実に自覚してくれています。現時点では、これ以上母牛を増やすことなく、2 世帯ずつ飼育者を回していく予定です。

【成果と課題】

カムクーン財団を通じた子ども個人への支援は、奨学金の提供や運営に問題があり、2018 年度を最後に、財団支援を終了します。これまで支援してきた子どもたちも大きくなり、学業や仕事へとそれぞれの道を歩み始めています。タイ国内で申請できる奨学金の選択肢も増え、大学や専門学校に通う子どもは多くなりました。しかし一方で、大学を卒業して、そのまま地方に帰ることなく首都周辺で住居を構えることも増えました。子どもたちが成長して大人になったとき、村落コミュニティが消滅して存在しないことにならないよう、コミュニティ内のつながりを強化する必要があります。そこで、タイでの事業の基盤をこれまでの子ども個人中心の支援から、子どもを見守るコミュニティづくりにシフトしました。これまでノーンメック村で村人たちと協働で行ってきた様々な活動を見直し、村委員会委員とも話し合いながら、有機農業と森林保護事業を継続させました。有機農業は、安全な食に関心を持つ者が増え、堆肥作りや実験農場での田植え・稲刈りにも参加する人が増えました。森を守り、自然を有効利用する方法として、何度か研修を行った草木染も若者を中心に副収入を得ることができるまでに熟練しました。村に居て、農業を続けながら、収入を得ることができる手段は、他の村人たちの関心を引き、若者たちに草木染を教えてもらう人も出てきました。子どもたちを大人たちの活動にどのように巻き込んでいけるかは今後の課題です。

C.海外プロジェクト助成事業

カンボジアのNGOであるKhmer Community Development(以下、KCD)を通じて、ベトナム国境沿いの村プレックチュレイとその周辺村の子ども会活動と有機農業推進事業を支援しています。

カンボジア農村では就学年齢になっても学校に行けない子どもがたくさんいます。その主な原因は、家庭の貧困で、農村は化学肥料や農薬に頼る換金作物栽培を続けたため、借金は増え、環境は破壊されています。農業収入に頼ることができないため、子ども連れで外国へ出稼ぎに行く家族も増えています。そのため KCD では農村開発事業に加え、生産コストを抑え、環境にも優しく、今後マーケットが期待される有機農業を推進しています。その他、新しい事業対象地での調査協力として、小学校の図書室の整備や本の補充に対しても支援しています。

C4C は、2016 年度よりタイで行うカンボジア人スタッフと農民のための有機農業研修事業を支援し、タイで有機農法のノウハウだけでなく、食品加工や市場開発などを学ぶ機会を持ってもらっています。

2018 年度は、離乳食時期に低体重、栄養不良の子どもが多いことから、食品栄養学専攻の日本人学生ボランティアサークルとの協働で、小さな子どもがいる母親と妊婦に対して、離乳食と栄養学的知識の伝える研修を行いました。

1. 子ども会ピースクラブの活動

クメール人とベトナム人が混在するプレックチュレイ行政区とその周辺農村で、子どもたちが民族を超えて共生するために子ども会を作り、全国ネットワークである青少年クラブにも参加し、様々な交流と自分たちのコミュニティのためのボランティア活動を行っています。その活動の一つが、村全体の就学率を上げるために、中高生が簡単なクメール語、英語、算数などを低学年および就学前の子どもに教える「小さな先生」となる青空教室です。その結果、プレックチュレイから高校に進学した子ども全員が大学にまで行くようになりました。しかし子ども会活動を通して多くの子どもたちがより高い教育を望むようになり、高校、大学受験の準備に忙しく、「小さな先生」としての活動になかなか時間がさけることができなくなりました。

そこで、OB/OG たちによる進学相談会を行うと同時に、何度も子ども会で話し合いをした結果、時間管理や授業スケジュールの見直しを図ることになりました。

またこれまで自分のコミュニティ内で行ってきた子ども会活動を周辺地域に広げようと、子どもたち自身が方法を考え、実行に移そうとしています。その一つが、子どもの権利の啓発活動として、何人かの子どもの実例を元に学業中退、親のネグレクト、子どもの自信のなさなどを解決するための動画を撮ることが決まりました。子どもたちが、シナリオ、演技、動画撮影などのすべてを行います。第一弾として若者の早婚についての啓発ビデオを制作し、Facebook に上げました。

子ども会活動は、現在、周辺地域の村にも広がり、プレックチュレイとその周辺地域 4 カ村を含むク

ラブにはメンバーが 53 人、プノンペンに 17 人、チョンサック村に 15 人、レヴィートーン村に 15 人います。

2. 有機農業推進事業

2018 年度は、プレックチュレイの有機農業実践者が 3 人、来タイし、タイの有機農業生産物販売グループや市場などを訪問しました。帰国後、自分のコミュニティ内でも帰国報告会を開き、経験の共有をしました。その結果、15 人以上の農民が新たに有機農業を始めました。

また、市場の開拓にも力を入れました。プレックチュレイでは、昨年からコミュニティ・マーケットの場所を確保し、有機農業生産物を始めました。そして首都プノンペンに学業や仕事で滞在する子ども会の OB/OG たちが協力して、市内のレストランなどと連絡を取り、有機農業生産物の販売経路を開拓しました。カンボジア在住の外国人や富裕層の間で、安全な食を求める動きがあり、静かなブームが起こっています。しかしながら有機農業による野菜の生産が追い付かず、現在のところ生産を増やすことにまず尽力しなければなりません。

【成果と課題】

2018 年から KCD の活動地域が広がりました。それに伴い、子ども会も新しい地域で設立しました。KCD はスタッフだけでなく、プレックチュレイの子どもたちとともに新しい地域で活動しています。そのことによって、就学率はかなり上がりました。しかし新しい地域の小学校の教育設備や備品はまだまだ充実していません。

有機農業はこれまでも支援していましたが、研修を行うことによって有機農業を始めたい人は増えましたが、一方で手間暇がかかるため、元の化学肥料や農薬を使用した農法に戻る人もいます。そのため有機農業の生産物がなかなか増えず、マーケットで売る産物も多くありません。今後、どのように生産者と生産物を増やすかを検討していきます。

1－2. 国内支援事業「宮城県における地域一体で取り組む福祉・防災学習推進事業」

『東日本大震災で甚大な被害を被った宮城県において、各地域の福祉力・防災力を高めるとともに、普段から、住民一人ひとりの命と暮らしを守ることを目指す。』

このことを実現するために、Ｃ４Ｃは 2018 年度、宮城県内で取り組まれる児童・学生・青年層が主体的に参画する福祉・防災学習の実施について、10 歳の子どもが成人する期間をイメージして、10 年スパンの学習ビジョンを持ちながら、福祉・防災学習を実施・検討・計画されている地元の社会福祉協議会、NPO、学校等とご相談しながら、次のようなことに取り組みました。

特に今年度においては、「ぼうさいグッズ手作りキット」や東日本大震災の経験を教訓としてつなぐ防災ゲームの新規開発、自主勉強会（相談会）の開催、中長期的な福祉学習推進事業を中心とした実践支援などを通じて、様々な学習者が主体的に福祉・防災学習に取り組める教材づくりや、福祉・防災学習推進の基盤づくりを目指しました。

1. 福祉・防災学習プログラム・ツール研究開発

● 「ぼうさいグッズ手作りキット」の開発

2017 年度に作成した家庭の防災ハンドブックに掲載されている「れんらくボードづくり」が好評だったことを受けて、楽しく作って・普段から使えて・防災力が自然と身につくことを目指した『ぼうさいグッズ手作りキット』の開発に取り組みました。ぼうさいポーチとぼうさいパラコードブレスレットの２種類のキットを作成し、開発にあたっては、フェルト絵本のお店シュシュバンビ、ＮＰＯ法人子どもグリーフサポートステーション、株式会社野村防災の協力をいただきました。

4 月 20 日に体験を実施した際は、子どもから大人まで 15 人の方にご参加いただきました。「楽しく取り組めた」「キットを作りながらおしゃべりができて、交流の機会になりそう」といった声のほか、キットの改善に向けたご意見もいただき、最終調整に活かすことができました。

● 東日本大震災の経験を教訓としてつなぐゲームの開発

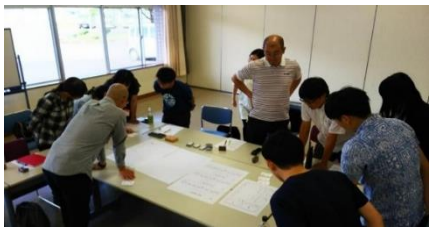
2021 年（東日本大震災の発生から 10 年）の完成を目指して、防災ゲームの開発に取り組み始めました。東日本大震災の発生直後から県内各地でおこった助け合い活動を、「あのときはよかった」で終わらせず今後に教訓としてつなげていくことを目指し作成します。県内外の学生・若者・親子・防災専門家とともにプロジェクトチームを立ち上げ、5 月 12 日に１回目の企画会議を開催しました。

2. 福祉・防災学習人材育成事業

● 自主勉強会（相談会）の開催

2017 年度に福祉学習勉強会を開催した際に、参加者から「今後学んだことを活かしていく際に相談しあえる場があれば」との声をうけ『自主勉強会（相談会）』を立ち上げました。

2018 年度は第３回（6 月 30 日）と第４回（11 月 10 日）の 2 回開催し、延べ 17 人に参加いただきました。県外からもご参加いただき、職歴や地域など関係なくつながり・語り合える機会をつくることができました。



✧　第３回「防災学習プログラムを見直したい！」

日時：2018/6/30 13:30～17:15

会場：柴田町地域福祉センター

参加者：11 人

話題提供者：八島裕晃さん（柴田町社会福祉協議会）

内容：話題提供「柴田町社会福祉協議会が取り組む防災学習」/防災学習プログラム体験/意見交換

✧　第４回「地域で若者が！？若者が地域に！？」

日時：2018/11/10 13:30～16:00

会場：宮城大学大和キャンパス

参加者：6 人

話題提供者：青木秀利さん（大和町社会福祉協議会）

ゲスト：佐々木優花さん（宮城学院女子大学ボランティアサークル Food and Smile!）

杉山裕子さん（仙台市社会福祉協議会若林区事務所）

内容：事例紹介（大学での学びを活かしたボランティア活動・高校生大学生のボランティア場づくり事業）／意見交換

3. 福祉・防災学習実践支援事業

４つの地域で５件の実践支援に取り組みました。単発の研修・事業を打ち出すことよりも、厚生労働省が「地域共生社会」の実現に向けた様々な社会福祉制度の改革を始めたことを受けて、改めて福祉学習の見直し・推進に取り組んでいきたいというご相談が増えています。

●　福祉教育推進事業運営委員会（2016 年度～2018 年度継続事業）

主催：女川町社会福祉協議会（宮城県社会福祉協議会「地域指定福祉教育推進事業」による実施）

「一人ひとりのちがいを認め合い、支え合うことの大切さへの気づきをうながす」ことをテーマに、運営委員会を設置。どのような取り組みが必要か・その際に必要な工夫や配慮は何かを話し合い、支え合いの啓発活動に取り組んできました。2018 年度は集大成として「ごちゃまぜ大会」を開催しました。（Ｃ４Ｃみやぎは運営委員会における進行役を担当）

2018/7/31	2018 年度第 2 回運営委員会
2018/8/30	2018 年度第 3 回運営委員会
2018/10/4	2018 年度第 4 回運営委員会
2018/11/6	2018 年度第 5 回運営委員会
2018/12/7	2018 年度第 6 回運営委員会
2019/1/16	2018 年度第 7 回運営委員会
2019/2/1	「ごちゃまぜ大会」参加団体説明会

2019/2/21	2018 年度第 8 回運営委員会
2019/2/23	「ごちゃまぜ大会」開催
2019/3/25	第 9 回運営委員会

● おおさき福祉学習推進事業（2016 年度～継続事業）

主催：大崎市社会福祉協議会

地域共生社会の実現に向けた、地域福祉推進の人材育成を目的とした福祉学習事業を実施。2018 年度は 7 つの支所で取り組まれている福祉学習事業について、各支所担当者が集まり情報共有・意見交換をしました。（Ｃ４Ｃみやぎは本事業のアドバイザーを担当）

2018/6/18	2018 年度第 1 回勉強会
2018/6/29	第 2 回勉強会について担当者打ち合わせ
2018/7/25	2018 年度第 2 回勉強会
2018/8/16	第 3 回勉強会について担当者打ち合わせ
2018/8/28	2018 年度第 3 回勉強会
2018/9/3	第 4 回勉強会について担当者打ち合わせ
2018/9/19	2018 年度第 4 回勉強会
2018/10/9	第 5 回勉強会について担当者打ち合わせ
2018/10/22	2018 年度第 5 回勉強会
2018/11/2	第 6 回勉強会および 2019 年度本事業について担当者打ち合わせ
2018/11/19	2018 年度第 6 回勉強会
2018/12/6	第 7 回勉強会および 2019 年度本事業について担当者打ち合わせ
2018/12/21	2018 年度第 7 回勉強会
2019/1/7	第 8 回勉強会および 2019 年度本事業について担当者打ち合わせ、前回参加者へのフォローアップ
2019/1/21	2018 年度第 8 回勉強会
2019/2/8	第 9 回勉強会について担当者打ち合わせ
2019/2/26	2018 年度第 9 回勉強会（2018 年度の振り返り）
2019/3/1	本所と 2019 年度計画について打ち合わせ
2019/4/12	本所と 2019 年度計画について打ち合わせ
2019/5/7	本所と 2019 年度計画・第 1 回検討会について打ち合わせ
2019/5/24	2019 年度第 1 回検討会

● 高校生・大学生のボランティア場づくり事業（2016 年度～継続事業）

主催：仙台市社会福祉協議会若林区事務所

協力：一般社団法人 ReRoots、東北学院大学災害ボランティアステーション、東北大学ボランティアサークルたなぼた、宮城学院女子大学ボランティアサークル Food and Smile!

区内で活動する大学生ボランティア団体と中高生がともにボランティア活動に取り組む場を創ることで、ボランティア活動の促進や中高生が将来のキャリアについて考える機会とするとともに、区内で活動するボランティア団体や地域団体の輪を広げることを目的として 2016 年度から始まった事業です。2018 年度は協力団体に東北大学ボランティアサークルたなぼたが加わり、ターゲットを高校生に絞って事業を実施しました。（Ｃ４Ｃみやぎは全体コーディネートを担当）

2018/6/15	第 2 回高校生向け説明会、第 2 回企画会議、夏プログラム打ち合わせ
2018/7/5	担当者と打ち合わせ
2018/7/18	担当者と打ち合わせ
2018/7/28	宮城学院女子大学ボランティアサークル Food and Smile!活動日（南小泉南赤十字奉仕団・防災クッキング）
2018/8/18	一般社団法人 ReRoots 活動日（六郷東部夏祭）
2018/8/29	担当者と打ち合わせ
2018/9/2	一般社団法人 ReRoots 活動日（わらアート製作）
2018/10/19	災害ボランティアセンター設置運営訓練関係者打ち合わせ
2018/10/27	東北学院大学災害ボランティアステーション・宮城学院女子大学ボランティアサークル Food and Smile!活動日（仙台市社会福祉協議会若林区事務所災害ボランティアセンター設置運営訓練）
2018/11/28	担当者と一年間の振り返り
2018/12/10	仙台東高校ボランティア部顧問と一年間の振り返り
2018/12/20	協力団体と一年間の振り返り
2019/4/5	2019 年度本事業について担当者と打ち合わせ
2019/4/12	2019 年度第 1 回企画会議
2019/5/14	担当者と打ち合わせ
2019/5/15	2019 年度第 1 回高校生向け説明会

- 2018/6/11　女川町立女川小学校　防災の授業

  依頼元：女川町教育委員会・女川町社会福祉協議会

  参加者：3 年生

  内容：防災リュックの中身を考えるグループワーク

昨年度に続き、3 年生を対象に防災リュックの中身を考える授業の講師を務めました。

- 2018/7/27　色麻町社会福祉協議会　「サマーボランティア事業」
  主催：色麻町社会福祉協議会
  協力：加美農業高校
  　　宮城学院女子大学ボランティアサークル Food and Smile!
  参加者：色麻町内の小学生８人
  内容：サバメシ体験ゲーム、防災クッキング

色麻町社会福祉協議会で新規事業を立ち上げられるにあたり、事業実施の支援を行いました。

4. 福祉・防災学習推進のためのネットワーク構築

県内で開催された研修への参加・事業の視察や、個別の情報交換・ヒアリング・相談対応を行い、福祉・防災学習にかかわる情報収集・提供、ネットワーク構築に取り組みました。

- 研修への参加

2018/6/27　石巻市社会福祉協議会「福祉学習推進研修会」

- 事業の視察

2018/9/1　岩沼市社会福祉協議会「ふれあいの広場」

- 情報交換・ヒアリング（順不同）

✧ 県内：石巻市社会福祉協議会、岩沼市社会福祉協議会、丸森町社会福祉協議会、宮城県社会福祉協議
会

✧ 県外：宇和島市社会福祉協議会（愛媛県）、大洲市社会福祉協議会（愛媛県）、海南市社会福祉協議会（和歌山県）、全国社会福祉協議会（東京都）、新潟県社会福祉協議会、公益社団法人日本フィランソロピー協会（東京都）、ＮＰＯ法人み・らいず２（大阪府）

５、普及啓発のための情報発信

- Facebook ページを活用し、情報発信に努めました。 https://www.facebook.com/c4cmiyagi/
- 宮城での実践を活かし、県外でのアドバイザー業務・研修会やワークショップ等の開催および協力に取り組みました。
  - ・7/23 岸和田市社会福祉協議会「福祉教育基礎研修・人権教育研修」（大阪府）
  - ・8/31 青森県社会福祉協議会・田舎館村社会福祉協議会「地域における福祉学習実践事業」
  - ・1/12 社協びと・学びの会「福祉教育にトリセツはあるの？」（高知県）
  - ・1/19 青森県社会福祉協議会・おいらせ町社会福祉協議会「地域における福祉学習実践事業」
  - ・1/29 広島市安芸区社会福祉協議会「防災の原点は地域にあり！」（広島県）
  - ・1/30 群馬県社会福祉法人経営者協議会・経営青年会
    　　「社会福祉法人・福祉施設の防災力向上のための勉強会」
  - ・2/16 福島県社会福祉協議会・天栄村社会福祉協議会「みんなでワクワク防災ごっこ」
  - ・5/11 一般社団法人 Wellbe Design「被災地応援ミーティング」（北海道）

【成果と課題】

- 福祉・防災学習プログラム・ツール研究開発事業

  ぼうさいポーチとぼうさいパラコードブレスレットの２種類のキットを作成することができました。開発にあたっては、フェルト絵本のお店シュシュバンビ（熊本）・ＮＰＯ法人子どもグリーフサポートステーション（宮城）、株式会社野村防災（新潟）の協力をいただき、被災地連携にもつながりました。4 月 20 日に体験を実施した際は、子どもから大人まで 15 人の方にご参加いただきました。「楽しく取り組めた」「キットを作りながらおしゃべりができて、交流の機会になりそう」といった声のほか、キットの改善に向けたご意見もいただき、最終調整に活かすことができました。

  また、東日本大震災の経験を教訓として活かす防災ゲームの開発にも取り組み始めることができました。

- 福祉・防災学習人材育成事業

  2018 年度は 6 月と 11 月の 2 回開催し、延べ 17 人にご参加いただきました。県外からもご参加いただき、職歴や地域など関係なくつながり・語り合える機会をつくることができました。

- 福祉・防災学習実践支援事業

  実践支援においては、4 つの地域で 5 つのプログラムの実践支援に取り組むことができました。単発の研修・事業を打ち出すことよりも、厚生労働省が「地域共生社会」の実現に向けた様々な社会福祉制度の改革を始めたことを受けて、改めて福祉学習の見直し・推進に取り組んでいきたいというご相談が増え、情報収集・研鑽しながら対応していきたいと考えています。

- 福祉・防災学習推進のためのネットワーク構築事業／普及啓発のための情報発信事業

  災害の多い 1 年であった中で、平成 30 年 7 月豪雨で被害を受けた広島県・愛媛県内の社会福祉協議会や、北海道胆振東部地震の支援に取り組んでいる団体から連絡をいただき、宮城での実践を紹介するかたちで今後の地域防災・支援活動を考える機会に寄与することができました。

こうした 2018 年度の取り組みや社会情勢・災害が多発している状況を受けて、2019 年度は、東日本大震災の経験を教訓として今後につないでいくための防災ゲームの開発（2018 年度から継続）、『ぼうさいグッズ手作りキット』の普及啓発、県内を中心とした実践支援などに取り組みます。

また上記のような実践活動に取り組みながら、引き続き、ネットワーク構築・情報発信などに取り組み、事業の実施体制やビジョンの構築につとめ、基盤強化をはかりながら、地域に根差した更なる福祉・防災学習の発展を目指します。

2. 文化交流活動支援事業

2－1. スタディツアー

◆タイ・スタディツアー

「地域を愛する子どもを育てるノーンメック村で“コミュニティワーク”を学ぼう！」

8 月 2－6 日＠タイ国コンケン県ムアン郡サワティー行政区ノーンメック村　参加者；10 人（仙台から 4 人、関西から 6 人）＋C4C スタッフ 3 人

タイ農村で地域コミュニティの活動や地元文化に触れるツアーを開催しました。社会福祉協議会職員、労働組合員、教師など多彩な社会人が参加しました。田植え、植林、牛銀行などの村の活動視察、日本での活動紹介、日本食の紹介など積極的に交流しました。田植えには、カンボジア人 5 人も参加し、様々な文化交流にもなりました。

2－2. チャリティラン応援事業（フィリピン・しょうがい児・者自立生活支援事業）

2019 年 3 月 10 日、フィリピン・ラ・トリニダッド町において、JPCom-CARES が主催する「Run for Amity 2019（友好ラン）」を応援するため、日本でも寄付者・スポンサーを募りました。

２回目となる今回は、①ギフト付き寄付を通したサポーターの募集、②子どもたちの参加を応援するスポンサーを募集しました。昨年に引き続き、沖縄から北海道まで、のべ 25 人の方々にご支援いただきました。ギフト付き寄付 58,642 円を現地団体に寄付し、スポンサー寄付 30,000 円は子どもたちの参加費として使わせていただきました。

★ご寄付の内訳

①ギフト付き寄付サポーター

寄付コース	申込額	寄付者数	計
てくてくコース	3,000 円	7 人	21,000 円
ルンルンコース	5,000 円	7 人	35,000 円
ランランコース	10,000 円	4 人	40,000 円
合計		**18 人**	**96,000 円（A）**
必要経費（ギフト代、発送代、包装代）			**37,358 円（B）**
現地寄付額			**58,642 円（A-B）**

②子どもたちの参加を応援するスポンサー

お申込み額（一口）	口数	**現地寄付額**
3,000 円	10 口（7 人）	**30,000 円**

3. 視察・研修・ワークショップ事業

3－1. 研修事業

1. カンボジア離乳食研修事業

◆カンボジアにおける離乳食研修（第一回）

日時：8 月 20―26 日　＠チョンサック村小学校

KCD、C4C、宮城学院女子大学栄養学部ボランティアサークル Food and Smile!（FAS）との協働で、カンボジア国カンダール県コントム郡チュークマウ行政区チョンサック村において、小さな子どもを持つ母親や妊婦に対する離乳食研修を初めて行いました。

日本では､FAS のメンバーが協力して研修準備を行い､現地には､FAS3 人、C4C スタッフ 3 人が渡航しました。

KCD では、これまで農村開発、平和構築、子どもの権利推進事業を行ってきました。しかし C4C と KCD は、農村の離乳期の子どもの低体重や栄養不良が多いことを憂慮し、子どもや家庭の健康を守る必要性を検討した結果、栄養学的研修事業として、カンボジアにおける離乳食研修 3 か年計画を考えました。そしてこれまで宮城県での防災福祉事業において協働関係にあった FAS に協力を要請し、離乳食研修が実現しました。

第一回目の研修では、①離乳食の子どもの成長における重要性を伝え、②月齢に従った離乳食を作る意味を伝えることを目的とし、エプロンシアターや調理実習によって知識を伝えました。研修一日目 17 人、二日目 15 人の母親および妊婦の参加がありました。また研修前後に家庭訪問し、研修参加者に離乳食知識や家庭状況について聞き取りを行いました。

なお本事業は、アジア生協協力基金の助成を得て行いました。

◆カンボジア離乳食フォローアップ

日時：10 月 16－21 日　＠チョンサック村

加藤副代表理事が、8 月に離乳食研修を行ったカンボジア国チョンサック村において、研修参加者の家庭環境、研修で得た知識とその後の離乳食作りなどの聞き取りを行いました。また 2019 年 3 月に実施する予定の第二回離乳食研修で使用する季節の野菜などの調査も行い、次回の研修時期、その内容や方法について KCD スタッフと少し話し合いました。帰国後、得た情報を FAS に伝え、今後の離乳食研修について内容と方法を検討しました。

◆カンボジアにおける離乳食研修（第二回）

日時：3 月 10－6 日　実施協力者：FAS４人、C4C３人、KCD スタッフ多数

前回に引き続き、宮城学院女子大学栄養学部ボランティアサークル FAS との協働でカンボジアのチョンサック村で離乳食研修を行いました。今回は、午前中 1 回だけで、マンゴー農園において、小さな子どもがいる母親だけでなく、夫や孫育てをしている祖父母を含め 20 人の村人が参加するなか開催しまし

た。

FAS は、前回の反省から、研修内容として、見やすくわかりやすく、誰でも参加できるように楽しいものを作り、栄養学的基礎知識を多くのテーマに盛り込みました。また三色食品群について、多くの絵を使ったり、ゲームをしながら学び合いました。研修の進行をスムーズにするため、学生たちが英語で伝え、KCD スタッフがクメール語に通訳する方法をとりました。

最後に、FAS が制作したクメール語訳した離乳食および栄養学的基礎知識の小冊子を配布しました。現地の参加者は、楽しみながら学べたようでした。

帰国後、FAS との話し合いの結果、毎年サークルメンバーが代わる中、継続した研修を実施することは困難である等の理由で、カンボジアにおける離乳食研修は一旦終了することになりました。

2. タイにおけるカンボジア人有機農業研修

日時：8 月 4−8 日　@タイ国コンケン県および周辺

カンボジア人農民 3 人、KCD スタッフ 2 人が、タイで有機農業研修を受けました。農業研修の目的は、①タイで有機農業農家を訪問し、その実践方法を学ぶ、②有機農業実践者の組織化やネットワーク化の経験から学ぶ、③マーケッティングと商品化のノウハウを学ぶことでした。そしてタイ人スタッフの調整によってコンケン県、マハサーラカーム県の有機農業コミュニティビジネス会社、病院の有機農業市を訪れ、実践者から直接様々な知識や経験を得ることができました。

参加したカンボジア人農民も積極的に質問し、タイ人有機農業実践者もカンボジア農村の状況を聞きつつ、どのように有機農業を進めていけばいいのかを一緒になって考えるよい機会にもなりました。

カンボジア人たちは帰国後、自分の村に帰って、タイで得た知識や経験を他の村人たちに伝える機会を 2 回 2 カ村において持ち、有機農業の普及に努めました。そして参加したカンボジア人農民の中から、有機農業を始める者が出てきました。

3. タイ人スタッフの日本招聘

日時：9 月 21 日—10 月 1 日

タイ国コンケン県ノーンメック村からタイ人調整スタッフとローカルスタッフ 2 人が、タイでのコミュニティワークを日本で紹介し、C4C 会員や支援者と文化交流するために来日しました。

仙台では宮城の地域福祉を考える会ゆいっこ「若者世代の“地域が好き”を育むプロジェクト」との共催で、タイの料理教室と「国を越えてコミュニティワークを語ろう！」というテーマで 8 月に実施したタイスタディツアーの参加者からの帰国報告会とタイ人スタッフとの情報交換会を行いました。

和歌山では、龍神村に移住した青年たちの田畑や炭焼きを視察した後、交流会を持ちました。大阪では、「東北タイ・ノーンメック村での地域づくり＆タイスタディツアー参加者報告会」と題して IDoCafévol.15 を開催し、これまでのスタディツアー参加者や会員が集まり、ノーンメック村で現在取り組んでいる事業やコミュニティの中で働くことについてタイ人スタッフに語っても

らい交流しました。

台風や関西空港の閉鎖などがあったにも関わらず、多くの人たちの参加や協力によって無事全日程を終えました。タイ人スタッフは、帰国後村の中で帰国報告会を行い、経験を共有しました。

3―2.　国内 IDoCafé（あい・どぅ・かふぇ）事業

◆IDoCafé vol.14.「2018.3. 11 フィリピン・チャリティ・ラン報告会～しょうがい児・者が笑顔で暮らす地域づくりを目指して、ともに走って、ともに歩いた！～」

7 月 21 日＠大阪社会福祉指導センター研修室②　参加者；25 人

3 月に実施したフィリピン・チャリティ・ランの様子を伝えるビデオを見て、現地で走った参加者にフィリピンで感じたこと、体験したことなどを報告してもらいました。最後に参加者同士で現地の取り組みを応援できるような活動アイディアを出し合いました。

フィリピンに行ったことはないけれど、関心があったので参加した方も多く、海外に行けないけれどもこの日本でできることを考える時間を持つことができました。

◆IDoCafé vol.15.「タイからピーノーン（兄弟姉妹）がやってくる！～東北タイ・ノーンメック村での地域づくり＆タイスタディツアー参加者報告会」

9 月 29 日＠難波市民学習センター第一研修室　参加者；28 人

8 月に実施したタイスタディツアー参加者による現地での学びや気づきを語ってもらい、タイ事業のスタッフであるトゥックさん、テオさんに住民として、コミュニティワーカーとしてそれぞれの視点から村での取り組みの紹介をしてもらいました。

4. パートナーシップ推進事業

4－1. 調査事業

（1）宮城県における地域一体で取り組む福祉・防災学習推進事業のための調査

調査実施者：Human Being　菅原清香会員

宮城県および周辺県等において、国内事業「福祉・防災学習推進事業」の実施主体を訪問し、ヒヤリング調査、研究、事業実施に関する意見交換を行いました。C4C の各事業と当事業との調整も行いました。

5. 情報提供事業

5－1. ホームページ、ブログ、Facebook による情報発信

2018 年 6 月～2019 年 5 月末の間に、1,611 人の方がホームページを訪問くださり、4,261 のプレビューがありました。昨年度と比較して、訪問者数 85 人、プレビュー数約 280 ページの増加となっています。ホームページと Facebook の活用方法を整理し、それぞれの特徴を活かした情報発信に努めます。

5－2. イベント参加

◆ワン・ワールド・フェスティバル

2 月 2－3 日 10：00－17：00 於カンテレ扇町スクエア、北区民センター

毎年行われる世界につながる国際協力の祭りに C4C として活動紹介ブースを出展しました。日本人大学生と協働した、C4C のカンボジア離乳食プロジェクトを紹介し、フィリピンのしょうがい児・者や保護者が作った手作りアクセサリーなどの販売を行いました。

6. 組織運営

◆2018 年度会員について

2018 年度会員・寄付者

●会員数の変動

		2017 年度	2018 年度 (2019 年 5 月 31 日現在)
正会員数	個人	18	13
	団体	2	2
賛助会員数	個人	22	23
	団体	1	0
使途指定寄付	指定寄付		1
	フィリピン・奨学金	3	1
	フィリピン・ラン	26	18
	フィリピン・ラン・スポンサー		7
一般寄付		5	8

総会員数は、2017 年度正会員(個人、団体)、賛助会員合わせて 43 人だったものが、2018 年度 38 人に減少しました。フィリピンへのスタディツアーを開催せず、正会員への情報発信が不足したことが理由です。フィリピンでのチャリティラン開催と並行して募ったギフト付き寄付は、募集期間が短かったにも関わらず、昨年度と同様の寄付者数がありました。

しかしながら SNS を通じた情報発信や IDoCafé など、国内で活動紹介をする機会が少なく、新たな会員の開拓に至っていません。SNS、キャンペーンやスタディツアーだけでは、なかなか新しい人たちにアプローチすることは難しく、C4C の活動を知ってもらい新規会員の獲得や会員継続のために何らかの取り組みを考えていきます。

2018 年度　　貸借対照表　(2019 年 5 月 31 日現在)

一般社団法人コミュニティ・4・チルドレン　　本来事業の会計

(円)

資産の部		負債の部	
流動資産		流動負債	
現金	49,472	未払金	53,190
普通預金	114,240	前受金	65,000
前払金	233,743	預り金	6,662
流動資産合計	397,455	仮受金	69,079
固定資産		流動負債合計	193,931
什器備品	132,461	固定負債	
固定資産合計	132,461	固定負債合計	0
		負債合計	193,931
		正味財産の部	
		前期繰越正味財産	824,664
		当期正味財産増減額	−488,679
		正味財産合計	335,985
資産合計	529,916	負債及び正味財産合計	529,916

2018 年度 本来事業の会計 財産目録

2019 年 5 月 31 日現在

一般社団法人コミュニティ・4・チルドレン

（円）

科　　目	摘要	金　　額		
資産の部				
流動資産				
現金		49, 472		
普通預金		114, 240		
--三井住友銀行		14, 620		
--ゆうちょ銀行総合口座		94, 620		
--ゆうちょ銀行振替口座		5, 000		
前払金		233, 743		
流動資産合計			397, 455	
固定資産				
什器備品		132, 461		
固定資産合計			132, 461	
資産合計				529, 916
負債の部				
流動負債				
未払金		53, 190		
前受金		65, 000		
預り金		6, 662		
仮受金		69, 079		
流動負債合計			193, 931	
固定負債				
固定負債合計			0	
負債合計				193, 931
正味財産合計				335, 985

2018 年度　損益計算書（予算対比）

2018 年 06 月 01 日～2019 年 05 月 31 日（配賦）

一般社団法人コミュニティ・4・チルドレン　本来事業の会計

（収入の部）　　**（円）**

	科目	予算額	決算額	予算残額
1.　会費収入				
	正会員受取会費	300,000	240,000	60,000
	賛助会員受取会費	300,000	115,000	185,000
2.　寄付金				
	一般寄付	20,000,000	16,867,187	3,132,813
	フィリピンのしょうがい児者応援寄付	0	39,292	−39,292
	使途指定寄付	0	962,850	−962,850
3.　事業収入				
	タイ・スタディツアー事業収入	2,000,000	350,000	1,650,000
	フィリピン・スタディツアー事業収入	700,000	0	700,000
	防災・福祉学習関連事業収入	0	7,000	−7,000
4.　民間助成金収入				
	民間助成金	2,000,000	1,000,000	1,000,000
5.　雑収益				
	受取利息	0	26	−26
当期収入合計(A)		25,300,000	19,581,355	5,718,645

（支出の部）

科目	予算額	決算額	予算残額
1．事業費			
■NGO支援事業			
海外支援事業費			
タイ・カムクーンカムペーン財団支援	5, 157, 666	3, 056, 697	2, 100, 969
タイ農村コミュニティ支援	0	2, 100, 969	−2, 100, 969
フィリピン・JPCom−CARES 支援	6, 633, 320	4, 316, 195	2, 317, 125
調整にかかる海外渡航費等	500, 000	570, 561	−70, 561
事業助成事業費			
海外プロジェクト助成（カンボジア KCD）	2, 200, 000	1, 361, 640	−1, 361, 640
調整にかかる海外渡航費等	0	688, 820	−688, 820
日本支援事業			
宮城県における福祉・防災学習推進事業	2, 130, 000	1, 020, 242	1, 109, 758
NGO 支援事業計	16, 620, 986	13, 115, 124	1, 305, 862
■文化交流活動支援事業			
スタディツアー事業費			
タイ・スタディツアー事業費	2, 000, 000	531, 606	−531, 606
フィリピンスタディツアー事業費	700, 000	0	700, 000
フィリピン・しょうがい児・者自立生活プログラム事業費（チャリティラン応援事業）	0	139, 968	−139, 968
文化交流活動支援事業計	2, 700, 000	671, 574	28,426
■視察・研修・ワークショップ			
国内 IDocafe 事業費	50, 000	18, 174	31, 826
招聘視察・研修事業費	2, 800, 000	2, 611, 735	188, 265
防災・福祉学習関連事業費	0	20, 923	−20, 923
視察・研修・ワークショップ計	2, 850, 000	2, 650, 832	199, 168
■パートナーシップ推進事業			
調査事業費	2, 800, 000	2, 440, 000	360, 000
パートナーシップ推進事業計	2, 800, 000	2, 440, 000	360, 000
■情報提供事業			
情報提供事業費	40, 000	29, 772	10, 228
情報提供事業計	40, 000	29, 772	10, 228
事業費支出計	25, 010, 986	18, 907, 302	6, 103, 684

（支出の部）

	科目	予算額	決算額	予算残額
管理費				
	給料手当	652,800	540,800	112,000
	旅費交通費	50,000	41,000	9,000
	会議費	3,000	13,300	-10,300
	通信運搬費	30,000	38,041	-8,041
	消耗品費	90,000	86,331	3,669
	新聞図書費	0	4,100	-4,100
	印刷製本費	50,000	31,752	18,248
	保険料	60,000	65,380	-5,380
	支払地代家賃	120,000	120,000	0
	諸会費	0	15,000	-15,000
	支払手数料	20,000	24,568	-4,568
	租税公課	2,000	0	2,000
	減価償却費	0	132,460	-132,460
	法人税、住民税及び事業税	70,000	50,000	20,000
管理費支出計		1,147,800	1,162,732	-14,932
当期支出費用合計(B)		26,158,786	20,070,034	6,088,752
当期収支差額(A)-(B)			-488,679	-370,107
前期繰越金(C)			824,664	
次期繰越金(A)-(B)+(C)			335,985	

2019年度　コミュニティ・４・チルドレン(C4C)　事業計画書
Community 4 Children
2019年6月1日～2020年5月31日まで

タイ国とフィリピン国において、現地の連携団体の運営と活動を支援するとともに、宮城県における福祉・防災学習を地域に根差した学びとなるように推進し、その基盤づくりを継続します。またより一層、支援活動を充実させるために、連携団体や関連する団体との相互交流を活発に行い、新しい事業に挑戦していきます。

アジアの子どもたちを継続的に支援するために、上記の活動を支える基盤となる会員や寄付者を募り、団体運営充実に力を注ぎます。

1. NGO支援事業

1－1. 海外支援事業

フィリピン国JPCom-CARESへの支援は継続します。タイでは、体制を変え、ノーンメック村コミュニティ支援事業として支援します。各地の現地の団体が主体的に助成金等の多彩な財源を獲得できるよう、C4Cからもアドバイスを行います。

A. JPCom-CARES(フィリピン共和国バギオ市、ハッピー・ハロー村、ベンゲット州カバヤン町)

今年度も自主財源の確保と持続的に活動していくことを目指し、ファンドレイジングを行っていきます。第3回チャリティ・ランに加え、昨年から始めた募金箱の設置は、パートナー先を100箇所に増やしていく予定です。また、新たにチャリティ・ズンバダンス大会を2回催します。青年や保護者が取り組むきのこ栽培や養豚などを通した生計向上プロジェクトは、安定した収入が得られるように社会資源も活用しながら支援を行っていきます。積極的に地域にアウトリーチしていくとともに、連携する地域パートナーとの関係をさらに深めていきながら活動への参画を働きかけ、しょうがいのある子ども・青年たちが地域の一員として参加していく活動づくり・地域づくりに取り組んでいきます。

B. タイ・ノーンメック村コミュニティ支援（タイ王国コンケン県）

ノーンメック村事業では、村人でもあるローカルスタッフを中心に、村の青少年を巻き込みながら有機農業推進とコミュニティ林の保護・保全活動を行います。有機農業実験農場での活動を増やし、ノーンメック村周辺地域やC4Cが支援するカンボジアNGOの農民たちと有機農業ネットワークを少しずつ広げることでコミュニティの再生を目指します。また村の青少年の就労支援として、草木染を応援します。将来的には、恒常的な副収入が獲得できるようなグループ作りや広報などを支援します。

これまで以上に村の子どもたちをコミュニティ活動に誘うため、稲作や公共地の植林活動における『結』による村の絆強化の他、子どもたちとともに行う種苗づくりを通じた支援を行います。

C. 海外プロジェクト助成（短期の事業単位での助成）

Khmer Community Development(KCD)－カンボジア国カンダール州プレックチュレイ地区の子ども会活動の支援を継続して行います。またコミュニティにおける有機農業を普及させるために、カンボジア人のタイにおける有機農業研修を昨年に引き続き実施します。

その他、ヒアリングや現状把握を行い、現地団体と寄り添いながら事業を進め、支援要請があった場合に、別に定める助成要綱に沿ってその都度検討します。緊切事項としては、KCD から要請があった、新しい活動地域であるレヴィートーン村小学校の図書室整備などを検討します。

1－2. 国内支援事業

A. 宮城県における地域一体で取り組む福祉・防災学習推進事業

2019 年度は、東日本大震災の経験を教訓として今後につないでいくための防災ゲームの開発（2018 年度から継続)、2018 年度に作成した『ぼうさいグッズ手作りキット』の普及啓発、県内を中心とした福祉・防災学習の実践支援などに取り組みます。

また上記のような実践活動に取り組みながら、引き続き、ネットワーク構築・情報発信などに取り組み、事業の実施体制やビジョンの構築につとめ、基盤強化をはかりながら、地域に根差した更なる福祉・防災学習の発展を目指します。

B. 国内プロジェクト助成

日本国内で子どもたちを中心とした地域づくり等を行っている団体のヒアリング調査･視察を実施し、対象事業を検討し、支援要請があった場合に、別に定める助成要項に沿ってその都度検討します。

2. 文化交流活動支援事業

2－1. スタディツアー

A. タイ・スタディツアーの実施

ノーンメック村との共同開催（8 月開催予定）

B. フィリピン・スタディツアーの実施

JPCom-CARES との共同開催（3 月開催予定）－現地でのファンド作りのためのチャリティラン参加者を募ります。

C. カンボジア・スタディツアーの実施

KCD との共同開催（２月頃）－初めてのカンボジアでのツアーを検討します。

2－2. 国際交流事業

2020 年度に、食に焦点を当てた Food Camp を「第二回青少年国際キャンプ」としてカンボジアで開

催するための、資金集め、調整などを行います。

3. 視察・研修・ワークショップ事業

3－1. 視察・研修事業

理事、社員、寄付者、専門家を中心とした現地視察、連携団体に所属するスタッフ、利用者への研修、および連携団体間の交流を実施します。

- 日本、タイ、フィリピンをはじめラオス、カンボジアなどのアジア諸国で、C4C と関連する活動を行う団体、個人との相互交流を図ります。
- 日本国内での現地報告会、講座や演習の開催、講師派遣
- 子どもを中心にした地域づくり推進を目的とした講座や演習の実施、もしくは講師およびアドバイザーの派遣

具体的には、8 月に**タイにおけるカンボジア人有機農業研修**を計画しています。植生や気候が似通ったタイに、カンボジア人スタッフ・農民を招聘して有機農業のノウハウ、生産物の加工、マーケッティング、有機農業ネットワークの運営などを学ぶ研修を行います。

3－2. 国内 IDoCafe 事業（年 2 回開催予定）

IDoCafe は、何らかの想いを形にし、社会に貢献しようと考える人々が、ディスカッションを通じて新しいつながりを生み出す場です。国内での情報発信のためにも、スタディツアー報告会を兼ねて積極的に開催するよう努めます。

4. パートナーシップ推進事業

4－1. 調査事業

- 日本、タイ、フィリピンをはじめ、ラオス、カンボジアなどのアジア諸国で、子どもたちを中心とした地域づくり等を行っている団体のヒアリング調査・視察を実施し、対象事業を検討し、パートナーづくりを進めます。
- 昨年度に引き続き、アジアや日本で活動する団体へ調査員を派遣すると同時に、これまで出会った団体との交流を深め、現場の状況やニーズから支援のやり方やあり方の相互理解を進めます。
- 宮城県における福祉・防災学習推進事業を推進するための調査研究・調整を年間委託して行います。

4－2. ホームページやブログなどを通じて、C4C の取り組みを発信しパートナーづくりを進めます。

5. 情報提供事業

5－1. ホームページ、ブログによる情報発信

C4C のホームページ、Facebook、CANPAN や ameblo 等のブログを随時更新し、C4C の取り組みを発信していきます。

5－2. イベント参加

ワンワールドフェスティバル等、国際協力や地域づくりに関連する様々なイベントに参加し、C4C の活動を紹介します。

5－3. 支援キャンペーン

支援団体や支援事業への寄付や参加を呼びかけるキャンペーンを実施します。

JPCom-CARES が 2020 年 3 月に開催するフィリピン・チャリティラン及び自主財源確保のために応援キャンペーンを行います。

5－4. 現地提携団体への情報提供

世界の動向をはじめ、活動をサポートする情報を提供します。

6. その他

上記の他、C4C の目的を達成するために必要な事業を実施していきます。

2019 年度　一般社団法人コミュニティ・4・チルドレン事業収支予算書 2019 年 6 月 1 日～2020 年 5 月 31 日			
		金　額（円）	備考
（収入の部）			
1．会費収入			
	正会員会費	300,000	
	賛助会員会費	300,000	
2．寄付金収入		12,000,000	
3．事業収入			
	フィリピンスタディツアー事業収入	700,000	
	タイスタディツアー事業収入	600,000	
4．民間助成金		1,000,000	
当期収入合計（A）		14,900,000	
（支出の部）			
１．事業費			
■ＮＧＯ支援事業			
海外支援事業費		（JICA 精算レート 2019 年 6 月に準ずる）	
	タイ・農村コミュニティ支援	2,090,500	605,214 タイ・バーツ
	ﾌｨﾘﾋﾟﾝ・JPCom-CARES 支援	4,670,836	2,217,576 ペソ
	調整にかかる海外渡航費等	500,000	
事業助成事業費			
	海外プロジェクト助成	2,000,000	カンボジア KCD 支援$18000
	調整にかかる海外渡航費等	200,000	
日本支援事業費			
	宮城県における福祉・防災学習推進事業	700,000	
■文化交流活動支援事業			
	フィリピンスタディツアー事業費	700,000	
	タイスタディツアー事業費	400,000	
	国際交流事業費	0	
■視察・研修・ワークショップ			
	国内 IDocafe 事業費	30,000	7 月
	招聘視察・研修事業費	400,000	カンボジア農民有機農業研修
■パートナーシップ推進事業			
	調査事業費	2,800,000	調査研究業務委託費 240 万円（宮城県）含む
■情報提供事業			
	情報提供事業費	30,000	HP 管理、イベント参加料等
	事業費計	14,521,336	

2. 管理費			
	給料手当	650,000	事務パート１人
	旅費交通費	50,000	
	会議費	10,000	
	通信運搬費	30,000	
	消耗品費	90,000	
	印刷製本	30,000	
	保険料	60,000	
	支払地代家賃	120,000	
	諸会費	15,000	
	支払手数料	20,000	
	租税公課	2,000	
	法人税、住民税及び事業税	70,000	
	管理費計	1,147,000	
当期支出合計（B）		15,668,336	
当期収支差額（A)-（B）		-768,336	
前期繰越金（C）		335,985	
次期繰越金（A)-(B）＋（C）		-432,351	

3km-009

ผลิตผล/ผลิตภัณฑ์พื้นบ้าน
AURA FARM